

# カフカの「変身」におけるマラーノ性と 変身の意味するもの

マリア＝ヘスス・デ・プラダ＝ヴィセンテ\*

## 1

本論はカフカ (Franz Kafka 1883–1924) の「変身」(*Die Verwandlung* 1915) について、英訳 (Malcolm Pasley: *The Transformation*, Penguin Books, 1992) と仏訳 (Claude David: *La Métamorphose*, Gallimard, 1990) と日本語訳 (高橋義孝「変身」新潮文庫 2012, 中井正文「変身」角川文庫 1992) をもとに、新たな解説を試みるものである。原文のドイツ語に依拠していないとはいえ、作品に現れるマラーノ性に着目し、主人公の変身の複雑な意味を考えたいと思う。

カフカにおけるマラーノ (Marrano) 的性格については、すでに小岸昭が言及している (『マラーノの系譜』みすず書房 1998)。ただし、氏は直感的にそう述べているだけで、作品を分析してそのような結論に達したわけではない。本論では、「変身」におけるマラーノ性を本文に基づいて検証し、そこから「変身」が何を意味するのかを追求したい。

カフカの「変身」については、これまで数えきれないほどの論文がさまざまな言語で書かれている。この作品が「空想的」であり、「不条理」であるという読みもあれば、人間の根本的な欲求不満をあらわしているという指摘もあ

---

\* 福岡大学人文学部非常勤講師

る。また、主人公の性格が「対立的」、すなわち矛盾しているという指摘もあれば、作者と父親との対立がそこに反映されているという見方もある。独身であった作者の執念と性的圧迫がこの作品に表れているといった、作者の実人生からの読みも数多い。

カフカのユダヤ性をこの作品に見る者もかなり多く、それとは逆に、そこにはユダヤ的性格はまったく見られないといった意見も存在する。しかし、「変身」にマラーノ性を見る論は、少なくとも論者は知らない。なお、本論での「変身」からの引用は、中井正文訳からのものであることを断っておく。

## 2

「変身」が書かれた1912年、カフカは「眼差し」(Betrachtung)という作品集を発表している。カフカ作品の仏訳者クロード・ダビによれば、この作品集のドイツ語のタイトルBetrachtungは、これが複数名詞であるなら「省察」または「自分に立ち戻る」という意味になるだろうけれども、単数形であるので「眼差し」(regard)が適切な訳だと主張している<sup>1</sup>。

しかしながら、「変身」を読む者は、主人公が部屋の「窓」から「外」を眺め、いろいろなことを思い浮かべる姿に接すると、そのような姿とこのBetrachtungを結びつけたくなる。単に「眼差し」ではなく、「瞑想」とか「省察」の意味が含まれるのではないかと思えてくるのである。おそらくBetrachtungというタイトルの意味するところは、「眼差し」でもあれば、「省察」すなわち自己洞察でもあるというのが論者の立場である。

というのも、このタイトルの意味の二重性こそ、「変身」を読む鍵となると思うからだ。「眼差し」と「省察」とは、まさに「変身」を動かす動因となっているのである。「変身」には、何度も主人公の部屋の「窓」が現れる。「窓」

---

<sup>1</sup> Claude David: *La Métamorphose* Gallimard, 1990, p.199

は主人公にとって「内」と「外」の境目で、その縁語は「鏡」なのである。「窓」は内から外を「眺める」ときの「眼差し」に結びつく。一方、「鏡」は自らを振り返るためのもの、すなわち「省察」となる。

では、この二重性はユダヤ性と関係があるのか。ユダヤ性をどうとらえるかによって、答えは異なる。ユダヤ性を正統ユダヤ教としてとらえるなら、この二重性をユダヤ的と言うことは難しいだろう。

カフカ自身は「僕はユダヤ人ではない、ユダヤと共通点がない」といった意味のことを述べている<sup>2</sup>。しかし、これを文字通りに受け取るよりは、別の可能性を見たほうが良いと思われる。その可能性とは、カフカを「マラーノ」という変種ユダヤ人と仮定することである。彼をマラーノと仮定すれば、上記の二重性の謎が解ける。

マラーノとは、キリスト教に改宗したユダヤ人を指す。ユダヤとキリスト教に引き裂かれた存在がマラーノであり、それはスペインとポルトガルの異端審問が生み出したものだ。「変身」のなかにキリスト教的要素が出てくるのも、これと関係する。なるほど、「変身」には「クリスマス」などキリスト教を示すものが登場するのだ。

いよいよクリスマスの晩にすこしもったいをつけて自分の意見を発表してやろう<sup>3</sup>

「クリスマス」のほかにも、「教会」「十字架」などが作中に登場する。これらはキリスト教とユダヤ教の両方に引き裂かれ、あるいはその両方に股がり、あるいはその両方から離脱してしまったマラーノの状況に呼応するのである。

---

<sup>2</sup> 井上正篤訳『フェリーツェへの手紙』（郁文堂 2000）

<sup>3</sup> 中井正文訳、角川文庫（1992）45 ページ。仏訳では「クリスマスの晩」は 'le soir de Noël' となっている。英訳では 'Christmas Eve' となっている。

カフカー一家の出自は不明な部分があるが、仮に彼らがマラーノではなく、アシュケナジム（東欧型ユダヤ人）に属していたとしても、西欧世界への同化の過程で多分にマラーノ的になっていたと考えられる。

### 3

先にも述べたように、一般にユダヤ人は大きく二つに分かれる。スペインや地中海に面したユダヤ人と、ドイツおよび東欧のユダヤ人とである。前者はヘブライ語で「セファルディム」(Sefhardim) と言い、後者はヘブライ語で「アシュケナジム」(Ashkenazim) という。この区別は、しかし、それほどはっきりしないところがある。ドイツ語圏に生きたユダヤ人であっても、セファラディムであることも十分あるからだ。

たとえば、スペイン北西部ポルトガル国境に近いタバラ (Tabara) という小さな村には、14世紀からユダヤ人のゲッターが存在したが、小間物商として南方から流れて来たあるユダヤ人家族がそこに根を下ろして経営した商店の看板にはスペイン語で Corneja と書いてあり、これをチェコ語に訳すと「カフカ」(Kafka) となる。カフカは鳥の名であり、タバラのユダヤ商店のロゴも、この鳥をデザインしたものになっている。

このことが単なる偶然とは言えないというのも、カフカの祖先は18世紀にチェコに流れて来たと言われているものの、その前のことはだれも分かっていないからだ。一方、前出のタバラの村にたどり着いたユダヤ系の家族の祖先も、18世紀までしかさかのぼれない。共通の祖先が両者にあったという可能性は、完全には否定できないのである。

カフカの母方の叔父がスペイン鉄道の支配人であったこと、カフカの生きていた当時のプラハにはスペイン式シナゴグがあったこと（現在も残っているらしい）、こうした事実も見逃せない。スペインではユダヤ人の異端審問が行われ、多くのユダヤ人が国外へ逃れ、14世紀から17世紀にかけて大規模な

ディアスポラが始まったことは周知のことである。もしかすると、カフカの祖先は異端審問を逃れて最初はスペイン西北部にもぐり込み（たとえば、タバラの村）、マラーノ研究で有名なセシル・ロス（Cecil Roth）が言うように、そのあとオランダに逃れ、そこから東へと移動したのかもしれない<sup>4</sup>。カフカの祖先とスペイン・ユダヤとの関係がまったくなかったとは、簡単には言えない。

前出のセシル・ロスによれば、スペインとポルトガルで行われた異端審問の結果、ユダヤ人のあいだに分裂が生じた。彼らの中にはユダヤ教にとどまった者もいたが、キリスト教に改宗した「アヌシム」（anusim）となったものもある。このアヌシムは、1391年に前々からのキリスト教徒と公式に区別された。こうして、キリスト教徒のなかに新旧の二種が生まれた。

ところが、この「アヌシム」も分裂する。自らカトリックの洗礼をうけながら、家ではヘブライ語で聖書を読みつけ、ユダヤのしきたりを守り続けた一派と、ユダヤ教では禁じられていた「豚」の肉を食べたり、ヘブライ語を廃止してカトリック以上のカトリックに成りきって「変身」した一派に分かれたのである。この後者をマラーノという。

以上から、マラーノにとって、「変身」は彼らの生き方そのものだったと言える。異端審問から逃れる手段が「変身」だったのだ。とはいえ、いくら「変身」したにしても、危険から完全に逃れられたわけではない。マラーノには複雑な二重性の意識が刻印され、そこからも逃れられなかった。

ところで、カフカ自身が自らの二重性について述べているのは、フェーリーツェ・パウアーへの書簡のおいてである。自分は「二頭の馬に乗ったサーカスの曲芸師」だと述べている<sup>5</sup>。この二重性の意識は、早くからキリスト教に改宗したマラーノの二重性に由来するだろう。

さて、自らの伝統を捨てたマラーノに永遠に与えられた課題は、「本来の自

---

<sup>4</sup> Cecil Roth: *A History of the Marranos*, Sepher-Hermon Press, 1974

<sup>5</sup> Claude David: *La Métamorphose* p.215 参照

分に戻る」ことである。その「本来の自分」がなんであるのか、人によって異なるだろうが、ともかくそれは先に述べたカフカの作品のタイトルである「眼差し=省察」(Betrachtung) とつながる。逆に言えば、カフカにマラーノ性を認めると、はじめてこのタイトルに込められた真意が理解できるのである。「眼差し=省察」とは「本来の自分」に戻るための過程であり、これはカフカの「変身」を読み解くうえでも重要である。

#### 4

「眼差し」において作者カフカにとって重要だったのは、世界をどのように見るかだけではなく、「本来の自分」に戻ることだった。そうであれば、このタイトルには単数形ではなく複数形の意味、すなわち「省察」の意味も含まれていることになる。さらに言うと、単数形はマイノリティー (minority 少数派) を暗示し、複数形はマジョリティー (majority 多数派) に呼応する。ドイツ的「白人社会」の支配下にあつて、ドイツ文明の影響のもとで生きつつ、ユダヤ人としてマイノリティーであることを、カフカ自身意識せざるを得なかったであろうから、そうした意識がアイデンティティーの探索へと彼を駆り立て、「本来の自分」についての「省察」を促したにちがいないのだ。

カフカ自身が残した手紙のなかには「僕は何者だろうか、ユダヤ人としての意識もないし」という言葉があるが<sup>6</sup>、これについても考え直す必要がある。パーベル・アイスナーの意見は、その点で重要な鍵となる。アイスナーはカフカと同じブラハに住んでいたユダヤ人で、カフカの伝記作者でもあるが、氏はカフカが住んでいたブラハには土着のチェコ人、支配者のドイツ人、両方のグループに属し得なかったユダヤ人がいたと述べているのである<sup>7</sup>。このことは、ここで問題にする「変身」を理解するのに欠かせない事実であり、ブラハにお

<sup>6</sup> 注2参照

<sup>7</sup> パーベル・アイスナー著、金井裕・小林敏夫訳『カフカとブラハ』審美社、1975

けるカフカの一家が「異邦人」として扱われていたことを示唆する。そういうなかで、「変身」の作者フランツ・カフカは、自分を異邦人のなかの異邦人として、すべての存在から嫌われていると感じていたのではないだろうか。彼には、何より「本来の自分」に戻る必要があったのである。

ところで、「本来の自分」に戻るといふ課題は、精神分析の祖フロイト (Sigmund Freud) が主張していたことにつながる。彼は 1932 年の講演で “Wo Es war, soll Ich werden” (それがあったところに、私は戻るべきだ) と言ったと言われるが、彼の言う「それ」が精神分析でいう「エス」であったにしても、マラーノを含めた同化ユダヤ人たちの「本来の自分」に相当すると考えられるのである<sup>8</sup>。

さて、カフカ一家がチェコ社会で成功したとしても、支配層のドイツ的な見方からすれば、面白くなかったにちがいない。他所から流れてきたユダヤ人が社会で成功すれば、土地に住み着いていたチェコ人たちから見ても面白くなかったろう。そうした状況に置かれていることを、「変身」の作者は誰よりもはっきり意識していたにちがいない。そうだからこそ、フェリーツェ・バウアー宛に書いた手紙に、「僕は二頭の馬に乗ったサーカスの曲芸師かしら」と書いているのである。ドイツ的文化が支配する社会において成功するとすれば、ドイツ人のように振舞わなければならない。ユダヤ人にとって、それは苦痛以外のものではなかったはずだ。まさにそうした苦痛が、「変身」を生み出しているのである。

そうした苦痛は当時のユダヤ人に共通するものだったであろうが、そのことを意識し、そのことから生まれ得る危険について深い洞察を示したのがカフカの「変身」である。カフカにそれが可能であったのは、人一倍の自己洞察力が

---

<sup>8</sup> この点については、ジョン・マレー・カディヒイ『文明の試練—フロイト、マルクス、レヴィ=ストロースとユダヤ人の近代との闘争』（塚本利明訳、法政大学出版局 1987）を参照すべきである。

あったからだが、それは彼の中にマラーノ的なものがあったからこそできたことだと思われる。マラーノの根本問題は、ユダヤ人であるのにそれを否定し、カトリックでないのにそれを告白するというパラドックスにあり、これをカフカ自身の言葉に言い換えると、「告白と嘘は全く同じものである」となるのである<sup>9</sup>。告白するために嘘をつく。そうしないと、自分の本来の姿を表現できない。しかし、そうやっても、「本来の自分」を伝えることはできない。

グスタフ・ヤノーホは『カフカとの対話』において、カフカは自分は誤解されていると述べていたと言っている。彼は「変身」について、「奇妙なことが書いてあると思われるかも知れませんが、自分は普通のもの自体がすでに奇妙で、僕はそれをただ記録するだけです」とも述べているのである<sup>10</sup>。まさにこれこそはマラーノの窓から見える外の風景であり、世間からグロテスクとか不条理、空想的、形而上的と思われる、彼のようなマラーノの性格にとってはごく「普通」のことだったのである。

## 5

「変身」がカフカの初期作品の集大成であることは、多くの研究者が認めている。しかし、これらの作品をカフカの自伝的作品として読み解こうとすれば、そこには限界がある。伝記研究の方法によっては、カフカの根本的な問題である「嘘」と「告白」の両義性を解明することはできないのだ。それにしても、初期作品の多くを発表したカフカが、なぜ「変身」だけは発表しなかったのか。

前出のフェリーツェに書いた手紙には、「恐ろしい話を書いた、君に読んで

---

<sup>9</sup> カフカは1920年に書いた手紙に「告白と嘘は同じものである。告白できるために、人は嘘をつく。人がそれであるところのものは、表現できない。なぜならば、人はまさにそのもの自体であるからだ。伝達できるのは、人がそうでないところのものだけである。コーラスの中にはじめてある種の真実があるのかもしれない。」と述べた。

<sup>10</sup> グスタフ・ヤノーホ『カフカとの対話』（吉田仙太郎訳、ちくま学芸文庫1994）



きかせたいが、きっと君は恐怖に落ちるだろう」とあり、彼自身、この作品を「恐ろしい」と感じていたことがわかる。また、これは「僕の書いたことは恐ろしいかもしれないが、今の時代だって恐ろしいし、僕の生きてきた時代も恐ろしい。僕自身の時間は、今の時代よりずっと長く恐ろしいものなんです」と述べている点にも注目したい。これを、先に引いた「僕は普通のことを書いているだけだ」という言葉と重ね合わせると、この作品は自分の生きてきた時間そのものの恐ろしさ、しかも、その恐ろしさが自分の周囲の世界の恐ろしさでもあるということを言っていることになる。そうした作品を発表するのは、彼にとって、やはりためられることだった。

ところで、「僕自身の時間は、今の時代よりずっと長く恐ろしい」とはどういう意味か。カフカをマラーノと仮定すれば、その謎が解ける。すなわち、彼の人生に流れ込んでいた時間は、スペインの異端審問以来ユダヤ人が生きつづけてきた「ディアスポラの長い長い時間」と解釈できるのである。もちろん、カフカ自身がそこまで意識していたかはわからないが、少なくとも彼が感じていた「僕自身の時間」が彼の生涯よりもはるかに長い、祖先から流れてきた時間を指していることは間違いないだろう。

では、カフカが実際に「恐れ」ていたものは何だったのか。カフカの生きていた時代は、まだホロカウストは始まっていなかった。しかし、ナチズム的なイデオロギーが少しずつ上昇しつつあったことは間違いない。当時のヨーロッパの多くの若者が、そうしたイデオロギーに魅力を感じていたこともあっただろうし、そのことを彼も敏感に感じていただろう。そして、そうした思想は、ともすれば社会への同化を目指すユダヤの若者にも伝染する可能性があったのである。人間は時として世の流れに逆らうよりは、自分たちの死を望むような世の風潮に染まりたくもなるものなのだ。

ところで、カフカが時代社会に感じていた恐怖は、フロイトも感じていたようだ。「幻想の未来」(Die Zukunft einer Illusion 1927)において、フロイトは

「集团的ナルシズム」による少数民族への抑圧を論じているが<sup>11</sup>、そこではっきり名を出していなくても、その少数派が自分たちユダヤ人を指しているのは明白である。カフカの恐怖は、このフロイトのものより10年以上も前に表現されているが、その恐怖が完全に「外」からのものではなく、「内」からのものでもあると見破ったところに、「変身」という作品の恐ろしさがある。マラーノには「敵」の側に転ぶことも、「内」側に転ぶことも、両方可能だということまでカフカは見てしまったのである。

ナチズムといえは、「国家社会主義」のことである。社会主義をユダヤ人と結びつけてユダヤ人差別を増幅した国家主義もあれば、社会主義を国家主義と結びつけることで、ユダヤ人をその敵とみなし、国家の力で抑圧する主義もあった。カフカが恐れていたのは、そうした国家社会主義が巨大になっていくことであり、「変身」にあらわれる「とてつもない毒虫」がその象徴となっている。「足」がいっぱいあり、それらの足のコントロールができない主人公グレゴールの悩みとは、だから、自分自身がナチのようになっていくのではないかという恐怖なのだ。

しかしながら、そうした見方は一義的な解釈にすぎず、そのほかにも主人公の変身には意味があるというのが本論の趣旨である。「変身」は外的世界による恐怖を描くとともに、内的世界からも湧き上がる恐怖を描いているのである。すなわち、「巨大な毒虫」は外部にあるだけでなく、内部にもいるということだ。

## 6

カフカの根本的な悩みは、「変身」に露骨に現れる「二頭の馬にまたがるサーカスの奇術師」の悩みである。それはチャップリンの映画「独裁者」(The

---

<sup>11</sup> Sigmund Freud: *L'avenir d'une illusion*, Editions du Cerf 2012

Great Dictator 1940) にも表現されている悩みであったが、そのことをカフカは知っていただろうか。

チャップリンはその映画でナチズム批判を行ったと思われているが、本当は、ヒトラーの裏にはユダヤ人が潜んでいる可能性、ユダヤ人の裏にはヒトラーが潜んでいる可能性、その両方を表現していると言える。そうした自己分析ができるからこそ、彼は自らを侵略する「恐怖」と戦い、その恐怖を表現し、そこから脱出する可能性を自らに与えることもできた。カフカの「変身」もまたそうした恐怖への挑戦であり、それを乗り越え、「本来の自分」に戻る努力の結晶なのである。

最初にも述べたように、「変身」という作品はいろいろな評価がされてきた。たとえば、ロベルト・ミュレール (Robert Müller) のように「きわめてドイツ的」と評価している人もいれば<sup>12</sup>、カフカの親友マックス・ブロート (Max Brod) のように、「最もユダヤ的な作品」だと評価している人もいる<sup>13</sup>。この二人の異なった評価が同時に並び立つことは難しいと思えるが、両立し得ないものの両立は、「変身」という作品の根本構造を示すものである。すなわち、クロード・ダビが指摘したように、「対立性」あるいは「二重性」がそこにあるのだ。

そもそも、カフカはこの作品で「現実」を描こうとしたというが、その「現実」がどこまで夢なのか、はっきりしない。ブルーストのように取り戻せない過去を求めているのか、それとも、ただ「本来の自分」に戻る努力をして、迷路にはまり込んだのか。そのどちらもあり得るところに、「変身」という作品の複雑さがある。主人公グレゴールの頭はあまりにも混乱しているために、「悪夢」にのみ込まれ、そこから逃れるには「死」しかないという強迫観念にとらわれていることも確かである。

---

<sup>12</sup> 注5の書215ページ

<sup>13</sup> 同上

これを時代状況と結びつけると、主人公グレゴールの問題は、自らのうちにある危険な思想＝ナチスのイデオロギーと、その犠牲になるであろうユダヤ人としての自らの死の予感との、その両方を見てしまったところにある。両立できない二重性の意識が、恐怖とともに作品の根底にあるのである。

## 7

「変身」における変身は、主人公グレゴール・ザムザが朝起きてみたら「巨大な虫」になっていたことを指すと多くの読者は思ってきた。しかし、実はこれは第一の変身であって、「虫」になった主人公はやがて意識を失い、ある種の死を経験してから、もう一度変身し、それから本当の死を迎えるのである。多くの読者は、この二回目の変身に気づいていない。

一回目の変身は家族を恐れさせると同時に、同情をも引き起こした。ところが、二回目の変身に対しての家族の反応は冷淡で、主人公は女中の「掃除」の対象となるのである。その「掃除」が終わって、ようやく家族は「春」を迎える。主人公の悲劇は、彼の家族にとっては喜劇なのだ。

作品に変身が二回あらわれるという見方は、作品にマラーノ性が色濃く投影されていると見ることによって可能となる。マラーノはキリスト教徒に「変身」することでユダヤ人として一度「死」んだのであり、キリスト教を捨てることでふたたび「変身」し、二度目の「死」を経験するのである。いったい、どちらが本当の自分なのか。そのどちらでもない、というのが答えである。マラーノの二重性とはそういうもので、それがカフカの「変身」に表れている。

## 8

作品は以下の文で始まる。

不安な夢からふと眼覚めてみると、一匹のとてつもない大きな毒虫に変

わってしまっているのに気がついた。

この時点で、グレゴールは夢から眼覚めたつもりであるが、いつもは目覚まし時計が鳴る午前四時に目覚めるのに、時計を見るとすでに六時半であり、しかも考えにふけている間にまた時が流れて、今度は六時四十五分になっている。本来目覚めるべき時刻から、二時間四十五分が過ぎているのである。これを文字どおりに解釈することも可能だが、実は定刻に目覚めていたのに、また眠ってしまったという可能性もある。また、眼覚めたと思っけていても、まだ夢の中にいるという可能性もある。あるいは、自分が夢から覚めたという夢を見ている可能性も、考えられるのである。そうしたいろいろな可能性があるなかで、「とてつもない大きな毒虫」というイメージだけが大きいのしかかっている。

「毒虫」には多くの「足」がある。それらの足は「頼りなく目の前でなさげなく動いている」。これについて主人公は「馬鹿げた考え」だと思っけてのだが、そうした「考え」が次から次へと現れ、それらが現実かもしれないと思っけてくると、ますます「恐」ろしくなるのである。だが、こうした考えがつづくということは、主人公が自分はほんとうに眼覚めているのかどうか疑っけていることである。夢なのか現実なのか、当人も不確かだ。

やかましい音を平気で眠ったまま聞きのがせることがあるだろうか。

グレゴールはこうした疑問をもちながら、まだ会社に行けるかもしれないという希望を捨てていない。日常の義務感が、夢か現実かはっきりしない半意識状態の彼に深く浸透しているのだ。

しかし、八時になっても彼は部屋から出ない。家族が騒いで、会社の支配人までもが様子を見に来るが、彼の部屋のドアは中から鍵がかかっているため、

外から開けて入ることはできない。錠前屋まで呼ばれる始末だが、「巨大な虫」になったと思い込んでいるにもかかわらず、「支配人」に自分は怠け者ではないということはどうしても釈明したいという気持ちにかられるグレゴールは、そこで精いっぱいドアを開けようとする。そのとき、「その歯切れのいい音がグレゴールを完全に眼覚めさせた」とあるから、それまでは完全に目覚めていなかったことがわかる。

夢とは完全に個人の世界のものであり、それが破られるのは、個人が個人の外の世界と接することによる。言い換えれば、それまで彼は何度か目覚めたはずなのに、実は目覚めていなかったのである。それまでの目覚めは、夢の中の目覚めにすぎなかったのだ。彼の頭をめぐっていたさまざまな考えも、したがって、これもまた夢である。このことは、カフカ自身が問題にしていた「告白」と「嘘」の問題とも関係する。「告白」とは現実に信頼があるからできることで、そこにおいて夢を語ればすべて「嘘」となるだろう。

## 9

さて、個人の夢が「外」の世界に曝されるとどうなるか。まず、グレゴールの変身を確認していない「内」の人々、すなわち家族、「外」の社会を代表する会社の支配人、この「内」と「外」の区別が導入される。そして、家族の反応だが、グレゴールがドアを閉じたまま部屋から出ずにいるとき、母親の呼び声に対して彼は「ええ、お母さん、すみません。もうちゃんと起きます」と答えると、その声を聞いた母親は、「苦しそうな呻き声」のように聞こえたにもかかわらず、「安心して足を引きずりながら立ち去」るのである。つまり、母親は息子に何の異常もないと思い込んだのだ。

父親も、妹も、彼に声をかけるが、グレゴールの「もう仕度は出来たよ」という声を聞いて、同じく安心する。そして、グレゴール自身まで、自分の声が変わったのがばれないように必死に努力していたにもかかわらず、その声変わ

りが「セールスマンの職業病」なのだと自らに言い聞かせて安心しようとするのである。この時点では、だから、一切がほとんど「正常」である。異常があると感じているのはグレゴールだけなのだが、その彼も、異常がないかのように振舞おうとしている。

会社の支配人はどうか。この「外」の人は、グレゴールが定刻に出勤しなかったことに対して、「私はこれまで君を落ち着きのある理性的な人間だと思い込んでいた」と苦言をもらすのだが、それに対して母親は、「きつと調子がよくない……うちのグレゴールが汽車に遅れたりはしない。せがれの頭のなかはお店のことでいっぱい、夕方になっても外出しない、毎晩家の中ばかり引っ込んでいます、糸のこぎりの細工ものに夢中。あの子にはとても強情っはりなところがありまして……確かに体の具合が悪いでございます、今朝がた自分ではそうじゃないと言っておりました」と必死に弁護するのである。

以上から、グレゴールは「外」からはごく普通の人と見られており、「内」からは仕事オタクであるかもしれないが、社会の役にたつ人間だという評価を受けていることがわかる。善良で真面目な仕事人間、これが両者に共通する評価である。

誰しも、「内」から見た場合と「外」から見た場合で評価は異なる。しかし、そうした異なった評価を同時に示しつつ、「本来の自分」が別のところにあると感じ、そこへ何とかして戻ろうと願うのがマラーノ的精神のあり方である。グレゴールの変身には、そうした願望が宿っている。「巨大な毒虫」になったと感じてはいても、同時にそういう自分を「外」の世界にぶつけてみたいという願望をもっているところに、それが表れる。会社の支配人に自分の思いを吐き出そうなどという考えも、そこから湧き起こる。いつもはしない寝坊をしたことも、彼の意思表示なのであり、初めて「本来の自分」に目覚め、それをさらけ出したいと思うのである。

## 10

「変身」におけるマラーノ性は、グレゴールが会社の支配人にそれまで言えなかった「本音」をぶちまけようとするところに端的にあらわれる。この行為は「本来の自分」を「外」の世界にさらけ出そうという努力のあらわれなのだが、同時に、以下の引用にもあるように、「内」の者たち、すなわち家族へのメッセージでもある。

罪のない家族の全員の前でわざとみせびらかさなくても・・・決心のあげくというよりも、こんなことを考えた間に引き起こされた異常な興奮のために無我夢中になって・・・ベットから飛び降りた。それはショックだったのだが、失敗ではなかった。

ドアをいよいよ開けようというとき、グレゴールは次のように思う。

なにを言っているのやら自分でもろく知らないまま・・・本当にドアを開けようと思っていたのだ。実際に自分の変わり果てた姿を人目にさらして、支配人と話すつもりだった。あれほど部屋の中へ入りたがっている連中に、この格好を一目で見せてやったら、どんな口をきくものか、それをしりたくてたまらなかった。連中はびっくり仰天して肝をつぶしたところで、それはもう自分の責任ではあるまいし、かえって自分のほうは気が楽になるかもしれない。もし、万一、あの連中が冷静にふるまってくれるようなら、それに自分一人が興奮していた原因そのものが無くなってしまおう・・・

自分の「変身」した姿を人々が見てどう反応するかを考えるのであるが、同時に二つの正反対の反応が予想されているところに注目したい。すなわち、「変



身」について人々が驚かない可能性と、びっくりして恐れる可能性の両方を、興奮しているにもかかわらず考えているのだ。正反対の二つをとっさに予測するこの精神、これもマラーノ的といえるだろう。というのも、マラーノの歴史は表と裏の二つを同時に思い描く心性を形成してしまったのであり、「変身」の主人公もそうした心性から、期待と不安という通常の状態を超えて、両極端の反応を予想してしまうのである。

しかし、グレゴールが興奮して「本音」を吐いたにもかかわらず、会社の支配人は彼の予測を超えた反応をしている。「あなた方には、一言でも何をしゃべっているのか意味わかりましたかね」「あれはまるで獣の声だった」と言ったのである。人間は自分の聞きたくないことを言われると、なんの話をしているのかさっぱりわからないという反応をするから、そういう反応を会社の支配人もしたと一応は説明できる。しかし、そうであってもなお、彼がグレゴールの声に「獣」を感じたことは確かで、恐怖が彼にも伝わったのだ。

グレゴールの言語についていえば、家族の者すなわち「内」の人間に対してと、支配人すなわち「外」の人間に対してとで、普段は使う言語が異なっていたはずである。しかし、「本来の自分」に戻ろうとした彼は、「外」向けの言語を使わずに、「内」の言語を使ったという可能性がある。それは支配人には「獣の声」としか聞こえなかったが、彼が普段使っていたドイツ語でもなければ、国語であるチェコ語でもない、別の言語を用いたという可能性がある。当時のプラハのユダヤ人が家庭内で使っていた「イディッシュ」を使ったのではないか、という可能性が出てくるのである。もしそうであったなら、ここでグレゴールは「同化ユダヤ人」から「ユダヤ人」へと「変身」したことになる。これは家族にとっては恐怖であったろうが、「本来の自分」に戻ろうとする彼には必要なことだったのだ。

支配人からみれば、「真面目」で、「理性的」であったはずのグレゴールが、反社会的ユダヤ人であることを恥ずかしげもなく公言し、しかも、その言語が

家族にしか通じない言語であったとなれば、その意味がわからないし、わかりたくもなかったろう。当時の社会において、ユダヤ人は支配者側からみれば人間以下、あるいは殺すべき「毒虫」であったにちががなく、その「毒虫」が勤勉な社員になりすましていたのに、いきなり「自分は毒虫だ」と宣言したのだとすれば、これは裏切りであり、恐怖にかられたとして当然である。

他方、この状況を絶対に「外」の世界にバレないようにしたいと願うグレゴールの家族にすれば、彼を「病気」だと判断するのがもっとも都合がよかったにちがいない。だから、「医者」を急いで呼びだそうとするのである。五百年にわたるマラーノの沈黙を破り、「本来の姿」を見せようとするグレゴールは、まさに「変身」した。しかし、これを「病気」または「正気を失った」と思ったがる家族の反応も理解できるのである。なにしろ、ヨーロッパ社会に同化しようとしたユダヤ人にとって、「本来の自分」を「外」に見せることはタブーに近かった。グレゴールが会社の支配人にしたことは、彼の家族にとっても一種の裏切りだったのである。

一方、グレゴールのほうは、

今朝になってから初めて彼は肉体的な快感を覚えた。自分の足の下に堅固な床がある。そしてうれしいことにはたくさんの足がともかく自分の意のままになったのだ。

とあるように、「足」=思想が統一され、「肉体的な快感を覚え」たと述べている。「本来の自分」に戻り、それを「外」に示すことができた喜びである。

ここで、「裏切り」というもう一つのマラーノの問題に触れておくと、マラーノは自らのアイデンティティーを「裏切」ってキリスト教徒となり、その「裏切り」を共有できる仲間とのみ共存し、「外」の社会との交流を最小限にしようとした。しかし、そのような生き方につねに疑問を抱いているために、「変

身」の主人公のように、自身のあり方をもさらに「裏切」って、「本来の自分」に戻ろうとするのである。

そもそもマラーノは、ヘブライ語やアラビア語やスペイン語でそれぞれ意味があり、そのどれもこれもがよくない意味である。背教者、偽善者、豚食いの汚れ者といった意味で、つまりは「豚」なのである（スペイン語では Marrano は豚を意味する）。そうしたことを自覚しているマラーノは、グレゴールのように、どうせそう思われているならば、一度くらいその姿を見せてやろうと決心する。それが「変身」における「毒虫」への変身の意味なのである。

## 11

グレゴールは「外」に対しても、「内」すなわち家族に対しても、自身の「変身」をさらけ出した。家族はこの新しい事態に困惑するが、彼が可愛がってきた妹、いままで兄思いであったはずの妹は、ついに彼の部屋を空にする決心をする。この決心に従う母親は、妹といっしょに「部屋掃除」を始めるが、その部屋が息子の心に刻まれた過去の記憶を象徴するものとわかっているので、「掃除」をためらうのである。このためらいは、秘密と残酷な事実の伴うマラーノの歴史の重みにつながり、「中学生の、さらに遡って小学生」のときの記憶として「家具」に象徴される。その「家具」を無理にも部屋から取り出そうとすることは、母親にはためらわれたのである。

歴史の否定、記憶の否定、それが妹の決断である。だが、グレゴールはそうした家族のやり方とくに反対はしない。それどころか、「この暖かく住み心地のいい、親ゆずりの家具で気持ちよく飾りつけられた自分の部屋」が「掃除」されれば、「思いのままの方向へじゃまものなしに這いまわることができる」と思うのである。妹の決心とは別の理由で、「変身」したからには新しい人生を歩めるだろうと思ったのである。

母親のほうは、「グレゴールの部屋をそのままにしてグレゴールが家族に

戻った時に自分が起こした様々な問題を忘れるだろう」と思い、グレゴールの先行きを心配する。妹のほうは、兄の「変身」が自分の将来に害を及ぼすに違いないと判断し、なによりも「家具」を片付けることを主張する。彼女にすれば、兄が社会の支配層のなかに忍び込んで成功しているあいだは大切だった存在だが、「変身」した今となつては、「年頃の娘たちにありがちな、どんな場合にでも自分の満足を求めたがる・・・熱狂的な性向もあずかつて」、あくまでも「掃除」を断行するのである。

ここには、同化ユダヤ人の三つの形態が描き分けられていると見るべきだろう。母親はそれまでの生活に執着し、過去の歴史を忘れまいとしているのに、妹はそうしたものを清算し、前に進みたいのである。一方、グレゴールは「本来の自分」に戻ることを宣言し、同化ユダヤ人の仮面を捨てるのである。

父親はどうかといえば、グレゴールの「変身」を全否定する。自分たちの努力を無にする息子の存在が許せないのだ。そのため、彼は「毒虫」となった息子に「リンゴの弾丸」を投げつける。それによって、グレゴールは大きな打撃を受け、死に向かうのである。

すでに呼吸がだいぶ苦しくなっている。走ることのために全精力をつかいはたして彼はよろめいた。もう目を開けていられないぐらい。頭がぼんやりして・・・

意識を失いかかった目で彼はちらっと見た・・・

そこで彼の視力はぱったり消えた。

父親が投げた「リンゴ」は、聖書の樂園追放の物語を連想させる。アダムとイヴのリンゴと重なる。聖書の神は、人間が「死ぬ」運命をもつ哀れな存在であることを告げた。グレゴールもまた、父＝神の命に従って、「リンゴ」によって「死」に至るのである。

ここで、グレゴールが自覚的に「変身」するまえに、同化ユダヤ人たちがすでに  
行っていた「変身」を思い出す必要がある。ユダヤ人でありながら、社会  
の支配層に入り込もうとし、社会に一定の地位を得たということが、すでに  
「変身」だったのである。この「変身」はグレゴールの家族にとって必要な  
ものであったが、彼が「本来の自分」に戻るといふ思いもよらない「変身」をし  
たために、父親はこれを全否定しようとしたのである。妹も、母親も、彼に死  
を与えることに同意する。彼らにとって、「本来の自分」に戻るといふことは最も恐  
るべきことであり、それだからこそ、過激な反応となったのである。

つまり、グレゴールの「変身」とは、社会内に一定の地位を得ていた家族に  
対しての、そして自分自身に対しての、「自分はマラーノなのだ」といふ宣言  
であり、一番やってはいけないことだったのである。そうした罪を犯した彼は、一  
家の神である父親によって「リング」の罰を受けたのである。

## 12

グレゴールの家族の経済状態は悪化し、広すぎる住居からの転居も考えられ  
るようになる。そうなると、どんな方法で死にかかっているグレゴールを移動  
させるかという問題が出てくる。「適当な大きさの箱へ二つ通気孔をぶちあげ  
さえしたら楽には運ぶことができるだろう」とあるが、「箱」はすでに「棺」  
を連想させる。

また、転居については、

家族の移転を主としている原因は、いままで親戚や、知り合いの連中のだ  
れもが蒙ったこともないような不運にみまわれているという憂慮と手の付  
けようもない絶望感にある。

と書かれてあるように、りっぱな同化ユダヤ人としてやっていた一家が、世の

中で侮辱されつづけてきたマラーノであるというグレゴールの宣言が公になったことで、打ちのめされていることを示す。そうした状況で、グレゴールは第二の「変身」をすることになる。

この第二の「変身」については多くの人が気づいていないようだが、家族だけがそれを「目撃」する。今度の「変身」は、ナチズム的妄想への「変身」なのである。「本来の自分」すなわちマラーノに戻る努力をしたにもかかわらず、誰にも歓迎されなかったグレゴールは、力尽きて、「あの父さえも、どんなにかなしい、嫌悪すべき姿をしようとも、れっきとした家族の一員には違いない」と自分を迫害した父親をも受け入れる。しかも、自分の部屋を「空」にされたことで過去へ戻るができなくなり、その部屋が物置どころかゴミ捨て場になるのを見て、ついに第二の「変身」を遂げるのだ。誰でもそうだが、自分の過去を消した人間はなにをするかわからない。グレゴールの二度目の「変身」はそうした状況で起こったのであり、彼を大切にしていたはずの妹も、兄の新たな「変身」に驚愕し、すばやく次のように両親に言う。

「ね、お父さま、お母さま・・・もうだめですわ。あなた方はまだ事情がわかりになっていないかもしれませんが、あたしにはよくわかってます。あたし、もうこの化け物の前でお兄さんの名前を呼びたくありませんわ。この化け物から解放されるような努力をしなくちゃいけない・・・。あれはあなた方おふたりの命取りですわ。そんな気がしてなりません」

こうして妹は、「あれがグレゴールだという考え方をまずおすてにならなくちゃいけない」と言い、「もしあれがグレゴールだったら、人間があんな獣と一緒に暮らすことぐらい、とっく昔に分かってくれて、自分のほうからどこかへ出ていってくれるでしょう。そうしたらお兄さんがいなくなってしまうわけですけど、あたしたちはおかげで、安心して生活できる」と両親を説き伏せるの

である。

そうした妹の言葉のなかで、次のものほどグレゴールの第二の「変身」の意味を言い当てたものはない。

あの獣はあたしたちを迫害し…すべてを奪い・・・家の中全部を平気な顔  
で占領して、あたしたちまで路地で夜明かしくちゃならぬはめになり  
そう

もはやグレゴールは家族の一員ではなく、家族の敵であり、家族を壊滅させる存在だということになった。

ここで、彼の第二の「変身」が、当時徐々に社会に浸透しつつあった反ユダヤ主義的な風潮と関係していることを忘れてはならない。「化け物」とはそうした風潮に染まることであり、この第二の変身は、グレゴールの妹が察知したように、家族にとって非常に危険なものだったのである。

「本来の自分」に戻ろうとしたのが第一の「変身」であったとすれば、この第二の「変身」はそれとは百八十度ちがう。しかし、そうした大きな「裏切り」こそが、まさにマラーノの二重性につきまとうのである。どちらにも転び得るということは、敵にも味方にもなり得るということである。「本来の自分」に戻ろうとしてそれを全否定されたグレゴールは、妹が見抜いたように、今度はナチス的な「化け物」になって、家族の脅威となるのだ。

とはいえ、その「化け物」も命尽きる。

グレゴールは教会の塔の時計が朝の三時をうつのをぼんやり聞いた。そして、いつもの朝のように窓の外がほのほのとしろみはじめるのを生き身で感じた。そのうちかれの頭は知らぬまにがっくりたれさがって、弱々しい臨終の息が鼻孔からかすかに流れた。

家族は女中に任せて、グレゴールの死体を「掃除」させる。葬儀はないのだ。「掃除」という言葉は、ナチズ時代にユダヤ人を一掃することを意味した。その意味で、ここでの「掃除」は、ナチス的に変貌するユダヤ人家族をも意味するのである。

このことはすなわち、グレゴールのナチス的な変身の危険に気づいた彼の妹も、彼の「掃除」に同意する彼の家族全体も、実はナチス的になっているということである。言い換えれば、時代全体が恐ろしい「化け物」になっているということで、それが「変身」という作品の最大のメッセージなのである。

三人は電車で郊外に出た。電車の中には三人のほかに客はだれもいなかった。暖かい日がさんさんとさしこんでいた。ゆったりと三人はこれから先のことをあれこれと語り合った。・・・彼らの新しい夢と良き意図の確認のように・・・

これは作品の末尾である。喜びと希望に満ちた将来が現れ、まるでハッピー・エンドのようだ。「化け物」がいなくなりすっきりした、とグレゴールの家族は思っているのである。しかしながら、作品をここまで読んできた者には、この上もない残酷さだとしか思えない終わり方だ。「本来の自分」に戻るというマラーノ的発想の全否定が喜びと希望に満ちた将来を保証するとするなら、それはあまりにも恐ろしい時代の幕開けを告げるのである。

以上、「変身」にマラーノ性という観点から光を当て、作品のなかでの「変身」の意味を追求してきた。時代社会と自身の内面に巣食う恐ろしい現実をとらえ、徹底的にそれを掘り下げた作品が「変身」だという結論に論者は到達する。そうした掘り下げがここまでできたということ自体、フランツ・カフカのマラーノ性のなによりの証拠となるであろう。この作品は、残酷なまでに自己



を徹底的に分析したものなのである。